



平成28年3月期 決算短信〔日本基準〕(非連結)

平成28年5月13日
上場取引所 東

上場会社名 明豊ファシリティワークス株式会社
コード番号 1717 URL <http://www.meiho.co.jp/>

代表者 (役職名) 代表取締役社長 (氏名) 坂田 明
問合せ先責任者 (役職名) 常務取締役 社長室長兼管理本部長 (氏名) 大島 和男
定時株主総会開催予定日 平成28年6月23日 配当支払開始予定日
有価証券報告書提出予定日 平成28年6月23日
決算補足説明資料作成の有無 : 有
決算説明会開催の有無 : 有 (機関投資家向け)

TEL 03-5211-0066
平成28年6月24日

(百万円未満切捨て)

1. 平成28年3月期の業績(平成27年4月1日～平成28年3月31日)

(1) 経営成績

(%表示は対前期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		当期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
28年3月期	7,372	△10.6	645	△11.9	570	1.3	374	6.8
27年3月期	8,244	0.0	731	17.0	562	46.0	350	57.1

	1株当たり当期純利益	潜在株式調整後1株当たり 当期純利益	自己資本当期純利益 率	総資産経常利益率	売上高営業利益率
	円 銭	円 銭	%	%	%
28年3月期	33.26	32.83	16.7	14.3	8.8
27年3月期	31.23	30.94	18.0	15.0	8.9

(参考) 持分法投資損益 28年3月期 一百万円 27年3月期 一百万円

(2) 財政状態

	総資産	純資産	自己資本比率	1株当たり純資産
	百万円	百万円	%	円 銭
28年3月期	4,240	2,399	56.3	211.08
27年3月期	3,713	2,101	56.1	185.72

(参考) 自己資本 28年3月期 2,385百万円 27年3月期 2,082百万円

(3) キャッシュ・フローの状況

	営業活動によるキャッシュ・フロー	投資活動によるキャッシュ・フロー	財務活動によるキャッシュ・フロー	現金及び現金同等物期末残高
	百万円	百万円	百万円	百万円
28年3月期	57	98	△146	1,361
27年3月期	203	△108	△285	1,351

2. 配当の状況

	年間配当金					配当金総額 (合計)	配当性向	純資産配当 率
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計			
	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	百万円	%	%
27年3月期	—	0.00	—	8.50	8.50	95	27.2	4.9
28年3月期	—	0.00	—	10.00	10.00	113	30.1	5.0
29年3月期(予想)	—	0.00	—	12.00	12.00		33.9	

3. 平成29年3月期の業績予想(平成28年4月1日～平成29年3月31日)

(%表示は、通期は対前期、四半期は対前年同四半期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		当期純利益		1株当たり当期 純利益
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円 銭
第2四半期(累計)	2,600	13.6	183	13.7	153	0.5	103	2.5	9.11
通期	7,400	0.4	660	2.3	590	3.5	400	6.9	35.39

※ 注記事項

(1) 会計方針の変更・会計上の見積りの変更・修正再表示

- ① 会計基準等の改正に伴う会計方針の変更 : 無
- ② ①以外の会計方針の変更 : 無
- ③ 会計上の見積りの変更 : 無
- ④ 修正再表示 : 無

(2) 発行済株式数(普通株式)

- ① 期末発行済株式数(自己株式を含む)
- ② 期末自己株式数
- ③ 期中平均株式数

28年3月期	12,725,000 株	27年3月期	12,725,000 株
28年3月期	1,423,500 株	27年3月期	1,511,500 株
28年3月期	11,247,521 株	27年3月期	11,213,131 株

※ 監査手続の実施状況に関する表示

この決算短信は、金融商品取引法に基づく監査手続の対象外であり、この決算短信の開示時点において、金融商品取引法に基づく財務諸表の監査手続は終了していません。

※ 業績予想の適切な利用に関する説明、その他特記事項

本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。業績予想の前提となる条件及び業績予想のご利用にあたっての注意事項等については、添付資料2ページ「経営成績に関する分析」をご覧ください。

当社は、平成28年5月23日に機関投資家向けの決算説明会を開催する予定です。当日使用する決算説明資料は、開催後速やかに当社ホームページに掲載する予定です。

○添付資料の目次

1. 経営成績・財政状態に関する分析	2
(1) 経営成績に関する分析	2
(2) 財政状態に関する分析	5
(3) 利益配分に関する基本方針及び当期・次期の配当	6
(4) 事業等のリスク	7
(5) 継続企業の前提に関する重要事象等	7
2. 企業集団の状況	7
3. 経営方針	8
(1) 会社の経営の基本方針	8
(2) 目標とする経営指標	8
(3) 中長期的な会社の経営戦略	8
(4) 会社の対処すべき課題	8
(5) その他、会社の経営上重要な事項	8
4. 会計基準の選択に関する基本的な考え方	9
5. 財務諸表	10
(1) 貸借対照表	10
(2) 損益計算書	12
(3) 株主資本等変動計算書	13
(4) キャッシュ・フロー計算書	15
(5) 財務諸表に関する注記事項	16
(継続企業の前提に関する注記)	16
(セグメント情報等)	16
(1株当たり情報)	17
(重要な後発事象)	17
6. その他	18
(1) 監査等委員会設置会社への移行について	18
(2) 役員の変動	18

1. 経営成績・財政状態に関する分析

(1) 経営成績に関する分析

当事業年度におけるわが国経済は、企業収益や雇用・所得環境の改善などにより緩やかな回復基調がみられましたが、為替相場変動に伴う影響や中国を始めとするアジア新興国などの海外景気の下振れにより、依然として先行き不透明な状況のまま推移しました。

建設業界では、前期に引続き建設物価高騰が喧伝され、併せて建設労務者不足も顕在化しています。一方、建設工事の適正な施工及び品質の確保と、その担い手の確保を目的として、「公共工事の品質確保の促進に関する法律の一部を改正する法律（平成26年法律第56号）」が、平成26年から国土交通省より公布、施行されるなど、CM（コンストラクション・マネジメント）サービスを含めた多様な入札・契約方式の活用方法が、公共分野においても取組まれるようになりました。当社は前事業年度に続き国土交通省が行なう「多様な入札契約方式モデル事業支援業者」公募に応募し、東京都府中市、清瀬市の庁舎建設に係るモデル事業の発注者支援事業者として受託し、当事業年度末に完了致しました。

また、公共工事の入札において工事費高騰が続く中、当社が発注支援業務（CM）を受託致しました千葉県市原市防災庁舎新築プロジェクトにおきましては、市が提示した上限提案価格内で、市と設計施工者が契約できたという新たな実績を積み重ねることが出来ました。市原市では、当社が、引続き設計・施工段階におきましても発注者側に立ち、品質、スケジュール、コストに関するマネジメント業務を実施しております。それらの結果、当事業年度に入り地方公共団体からの問い合わせが増加しました。

このような中で当社は、大手民間企業からは「顧客側に立つプロ」として、徹底したコスト削減策のみならず、プロジェクト早期立上げ支援や、事業化支援業務といった上流工程からの引き合い案件が増加しています。当社サービスが「発注者支援業務＝明豊のCM（コンストラクション・マネジメント）」として認知され、拡大しました。

当社の売上高は顧客との契約形態によって変動するものであり、契約形態は顧客がプロジェクト毎に選択可能です。当事業年度における売上高は顧客の契約形態の選択の結果、ピュアCM（工事原価を含まないフィーのみの契約型CM）が増加し、アットリスクCM（工事原価を含む請負契約型CM）が減少しました。これにより売上高は、7,372百万円（前期8,244百万円）へ減少しました。

社内で管理する粗利益ベースでの売上粗利益は、前事業年度比で約2%上回り、過去最高を記録しました。

販売費及び一般管理費は、体制の強化を図り前事業年度より約3%増加したものの、売上総利益は1,783百万円（前期1,840百万円）、営業利益は645百万円（前期731百万円）、経常利益は570百万円（前期562百万円）、当期純利益は374百万円（前期350百万円）となり、過去最高益を更新しました。

セグメントの業績は次のとおりです。

① オフィス事業

日本国内における事業再編の動きは継続しており、事業所移転などの需要が継続しております。

当社のCM手法によるPM（プロジェクト・マネジメント）サービスは、移転の可否やワークスタイルの方向性を検討する構想段階およびビルの選定から引越しまでワンストップで支援することが可能であります。大企業におけるグループ企業の統廃合、地方拠点の集約化、また、大規模な新築ビルの竣工時同時入居プロジェクトなど、難易度の高い事業所移転に高い優位性を発揮しました。

当事業年度のオフィス事業の売上高はアットリスクCM（工事原価を含む請負契約型CM）での案件が増えたこと等から3,906百万円（前期3,595百万円）となりました。

② CM事業

労務費や資材の高騰などにより建築費予算超過に悩まれた顧客からの引き合いの他、工場や研究所、医療施設等の建設を伴う新規事業のプロジェクト立上げ等、多くの提案機会を得ることができました。建物の新築・リニューアルのみならず、バブル期に建設された建物の基幹設備老朽化に関連した大型空調・電気設備の更新について、民間企業だけでなく公共機関からも幅広く受注することができました。公共分野では、平成27年5月には、横浜市立市民病院再整備事業コンストラクション・マネジメント業務について、公募型プロポーザル方式が実施され、当社が受託致しました。6月には福島県電源地域振興財団のJヴィレッジ復興・再整備CM業務（福島県復興のシンボルとして平成31年4月までに新たな価値を持った世界トップクラスの施設へと再整備する事業）の契約を締結し業務を遂行しております。12月には横浜駅西口の大型ショッピングセンター地下施設全面リニューアル工事のCM業務を約3年間に亘って遂行し、完了いたしました。また平成28年1月に大阪府立大学が一般公募した「大阪府立大学の学舎整備事業のCM事業者募集（業務期間平成28年度～平成29年度）」にりそな銀行と共同で応募し、7年連続で受注することができました。

当事業年度のCM事業の売上高は、アットリスクCM（工事原価を含む請負契約型CM）方式を採用している大阪府立大学の事業規模減少により2,421百万円（前期3,263百万円）となりました。

③ CREM事業

大企業向けを中心に、保有資産の最適化をサポートするCREM（コーポレート・リアルエステート・マネジメント）事業については、当社技術者集団による透明なプロセス（CM手法）とデジタル活用による情報の可視化やデータベース活用が、多拠点施設の新築・改修・移転だけでなく基幹設備の維持管理にも優位性を発揮致しました。工事コスト管理や、保有資産のデータベース化による資産情報の集中管理、さらに多拠点同時進行プロジェクトの進捗状況を効率的に管理するシステム構築など、顧客ニーズに合わせて事業性を高めることのできる当社の専門性およびマネジメント能力が、着実に顧客の評価を獲得出来ており、複数の商業施設、オフィスビル、営業窓口等を保有する大企業、金融機関等から継続してご依頼頂き、受注は堅調に推移致しました。

当事業年度のCREM事業の売上高はピュアCM（工事原価を含まないフィーのみの契約型CM）方式が増えたことから1,044百万円（前期1,386百万円）となりました。

・体制強化について

当社は予めからCM（発注者支援業務）の認知度向上による顧客からの高い期待に応えるため、建設や設備に関するプロのほか、業務改革やICTに関して助言できるプロ、気付きのあるPMなどを積極的に、かつ厳選して採用しております。

また、社内で開催するPMカレッジにて明豊のPMマインドを社員へ伝授し、マネジメントスキル等の向上に向けたカリキュラムを充実させるなど、社員教育にも注力しております。さらに当事業年度より全従業員を対象にコミュニケーションスキル研修を定期的開催し、社内外に向けたコミュニケーションスキルの向上に取り組んでおります。

社員はそのような受講による能力の向上のほかに、社内に10数年に亘って整理・蓄積された行動分析に関するビッグデータを活用し、自らのアクティビティの改善や、キャリアビジョン実現に向けた上司との協働などによって、主体的な能力の向上を図っております。

・コンプライアンス等について

事業を継続するためには、コンプライアンスの徹底と、社会的責任の履行（CSR）が不可欠であります。

当社は各プロジェクトに関するプロセスや成果等の可視化のほか、企業業績等に関する情報も社内に対して可視化することによって、会計に関する法令を含め、事業に関連する各種法令を遵守しております。

また、CSRへの取組みに関する方針を定め、併せて「フェアネス・透明性」の企業理念と共に企業風土として持続させることを念頭に、社員と一丸となって行動しております。

（CSRへの取組みに関する方針）

<http://www.meiho.co.jp/corporate/csr.html>

(次期の見通し)

次期の見通しにつきましては、景況感悪化等により投資が慎重になる等、国内経済は依然として不透明な状況が続くと予想されます。

建設業界においては、一部の建設物価がやや落ち着きを見せ始めましたが、発注者のコスト意識の高まりは従来にも増して続くものと考えられます。また、建設業界に限らず、多くの業界で偽装や隠蔽問題について広く報じられ、発注者側に立つプロへの世の中の関心が高まっております。

このように適正な品質、コスト、工期での実現が不安視されている中、当社がCM会社として顧客の期待に応える為には、顧客のプロジェクト目的の理解と競争原理の追求によるコストの最適化及び工事関係者の品質確保や工期遵守に対して、従来にも増して密度の高いマネジメントが必要と考えています。

一方で企業には社会的責任や説明責任が強く問われています。それ故に私共では、自ら立ち位置を常に意識しながら、「顧客本位のプロのサービス」を片時も忘れることなく、プロジェクトの立ち上げ支援から竣工、施設の群管理、中長期保全計画作成支援等に至るまで、毎年成功事例を数多く積み重ね、更なるサービス品質向上に努めてまいります。

オフィス事業については、大型の新築オフィスビルが五輪までに供給量が増加する予想の中、移転ニーズは引き続き継続すると予想しております。東日本大震災以降、耐震ビルへの移転が一般化しており、当社が行っているBCP対策の他、今までの豊富なコンサル実績を基に様々な顧客要望に応えることができることから、明朗会計をモットーとするCM手法の優位性も踏まえ、サービス品質の向上に努めることで事業拡大を実現してまいります。

CM事業については、大手企業を始めとして、教育施設、鉄道施設、商業施設、生産施設、研究施設、医療施設、公共施設等において、これまでの当社のCM実績が評価され、継続した受注が見込める状況にあります。我が国でのCM（発注者支援業務）の認知度向上に伴い、引き続き市場が拡大するものと考えております。

CREM事業については、大企業を中心にLCC（※）を意識した企業不動産への設備投資が顕在化しております。

金融機関や大手企業等が全国に所有する自社保有不動産等を中央統制する事例が増え、そういった流れの中で個別にプロジェクト化した際のCM手法による調達プロセス等の説明責任履行や、ノンコア業務のアウトソーシングニーズ、コスト削減や工期短縮意識が引き続き高まっており、今後も当社のデータ活用によるCM手法に関するマーケットが拡大すると考えております。

なお、CREM事業の既存のお客様については、各種データベースの集積やプロジェクト進捗管理システムの効率化（特許取得）が進み、お客様に大きなメリットを提供しています。同一企業内での当社業務範囲が年々拡大し、当社の事業基盤がより安定するビジネスであることから、引き続きサービス品質の向上に努めることで事業拡大を実現してまいります。

※LCC（life cycle cost：ライフサイクルコスト）

製品や構造物を取得・使用するために必要な費用の総額。

企画・設計から維持・管理・廃棄に至る過程（ライフサイクル）に必要な経費の合計額をいう。

売上高及び営業外費用について改めて説明致します。

大阪府立大学が一般公募した「大阪府立大学の耐震改修等の学舎整備、教育環境整備事業」に関するCM事業者募集はりそな銀行と共同で応募し、7年連続で受注することが出来ました。これはCM手法を採用することによって整備事業推進の透明性を確保することと、公立大学法人が長期借入れを行うことが出来ない中で、事業費を10年分割払いにすることが募集要項の主たる要求事項であります。当社は工事請負型のアットリスクCM方式でこれに対応し、総事業費の多くが次期(第37期)に完成致します。また完成により発生する完成工事債権については、完成後速やかに当社が金融機関へ債権譲渡を行う予定であります。この債権譲渡に要する費用(約70百万円)は大阪府立大学の負担となることから、当該大学側の負担額分については、当社の売上高、売上総利益及び営業利益を増加させると同時に、同額(約70百万円)の営業外費用を当社が計上することによって、経常利益は増加前の営業利益相当額なるものであります。

これらの結果、次期売上高は7,400百万円、営業利益は660百万円、経常利益は590百万円、当期純利益は400百万円となる見通しであります。

(2) 財政状態に関する分析

①資産、負債及び純資産の状況

(資産)

流動資産は、前事業年度末に比べて、16.5%増加し、3,913百万円となりました。これは、完成工事未収入金が646百万円増加したことなどによります。

固定資産は、前事業年度末に比べて、7.8%減少し、326百万円となりました。

この結果、総資産は、前事業年度末に比べ14.2%増加し、4,240百万円となりました。

(負債)

流動負債は、前事業年度末に比べて、16.5%増加し、1,409百万円となりました。これは、工事未払金が197百万円増加したことなどによります。

固定負債は、前事業年度末に比べて、7.3%増加し、430百万円となりました。これは、退職給付引当金が32百万円増加したことなどによります。

この結果、負債合計は、前事業年度末に比べ14.2%増加し、1,840百万円となりました。

(純資産)

純資産合計は、前事業年度末に比べて、14.2%増加し、2,399百万円となりました。これは、繰越利益剰余金が278百万円増加したことなどによります。

②キャッシュ・フローの状況

当事業年度における現金及び現金同等物（以下、「資金」という）は、前事業年度末に比べ10百万円増加し、1,361百万円となりました。

当事業年度末の各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果取得した資金は、57百万円となりました（前事業年度は203百万円の取得）。

取得の主な内訳は、税引前当期純利益570百万円であります。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果取得した資金は、98百万円となりました（前事業年度は108百万円の支出）。

取得の主な内訳は、定期預金の払戻による収入100百万円であります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果支出した資金は、146百万円となりました（前事業年度は285百万円の支出）。

支出の主な内訳は、配当金の支払額94百万円であります。

(参考) キャッシュ・フロー関連指標の推移

	平成24年3月期	平成25年3月期	平成26年3月期	平成27年3月期	平成28年3月期
自己資本比率	42.7	44.6	47.7	56.1	56.3
時価ベースの自己資本比率	37.9	46.7	73.4	91.8	87.4
キャッシュ・フロー対有利子負債比率	77.6	359.7	149.6	39.3	19.1
インタレスト・カバレッジ・レシオ	111.1	27.8	60.4	106.1	63.7

(注) 自己資本比率：自己資本／総資産

時価ベースの自己資本比率：株式時価総額／総資産

キャッシュ・フロー対有利子負債比率：有利子負債／営業キャッシュ・フロー

インタレスト・カバレッジ・レシオ：営業キャッシュ・フロー／利払い

※株式時価総額は、期末株価終値×期末発行済株式数（自己株式控除後）により算出しております。

※有利子負債は、貸借対照表に計上されている債務のうち、利子を支払っている全ての負債を対象としております。

(3) 利益配分に関する基本方針及び当期・次期の配当

当社は、将来の事業展開への経営体質強化のために必要な内部留保を確保しつつ、株主に対して安定的かつ継続的に利益還元することを基本方針としております。また、配当性向33%程度（平成28年3月期迄は30%）を基準とし、財政状況、利益水準などを総合的に勘案したうえで、利益配当を行ってまいります。

当期（平成28年3月期）の配当金に関しましては、当該方針に基づき検討した結果、持続的な成長を目指す上で増員等の経営体質強化に見合う内部留保を確保するため、1株当たり10.0円（配当性向30.1%）の期末配当を予定しています。

また、次期（平成29年3月期）の期末配当（年間）につきましても、持続的な成長を目指し、1株当たり12.0円（配当性向33.9%）を予定しています。

(4) 事業等のリスク

当社の業績及び財務状況に影響を及ぼす可能性のある主なリスクを記載します。当社は、これらリスクの可能性を認識し、リスク管理を行うとともに、最善の対処をいたす所存です。なお、これらは当社の事業に関するリスクのすべてを網羅するものではないことをご留意ください。

文中における将来に関する事項は、当事業年度末(平成28年3月31日)現在において当社が判断したものであります。

①事業環境の変化について

当社は、オフィス構築や建物の建設においてCM(コンストラクション・マネジメント)手法でのPMサービスを提供しています。経済環境、景気動向による企業の設備投資意欲の変化、既存建設業者との競合状況の変化などが、当社の業績及び財務状況に影響を与える可能性があります。

②ピュアCM方式への転換について

当社では、マネジメントフィーのみを収益の源泉とするピュアCM方式への転換を図っておりますが、それに伴い売上高利益率や総資本回転率などの財務分析比率が変動するほか、売上高や運転資金需要も減少する可能性があります。従いまして、売上高を指標に当社の経営成績や収益力を分析する場合には、全体に占めるピュアCM方式の割合に留意する必要があります。また、かかる契約形態はお客様の意向によって決まることから、必ずしも当社の計画どおりにピュアCM方式への転換が進む保証はありません。

③フィービジネスの安定性について

フィービジネスでは、資材・設備等の材料費や外注費などのコストや物価変動に収益が左右されることがなく、基本的に安定した収益を確保できると考えられます。ただし、お客様との間で業務内容毎にマンアワーベースで計算し事前に取り決める固定フィーに関して、マンアワーの見積りが不相当であった場合や、プロジェクトに従事する当社社員の労働生産性効率が低下した場合などには、フィービジネスであっても安定した収益を確保できるとは限りません。

④情報共有システムの障害について

当社では、ウェブ上での情報共有システム(BPC※)を活用し、設計図書の作成・発注・施工の各プロセス情報を開示・共有化することでお客様の信頼確保・意思決定支援、当社の業務効率向上に役立てております。これら情報共有システムの運用・保全には万全を期しておりますが、活用するスキルが不十分な場合や、システム自体に不具合が生じた場合などには、業務効率が低下してマンアワーのコストアップを招くなど当社の業績に影響を及ぼす可能性があります。

(※)BPC:ビジネスプロセスコラボレーションシステム

ブロードバンドや光回線の普及に伴い大容量の通信が安価に可能となったことにより、お客様及び施工者等の関係者で行う一連の作業を閲覧するだけでなく、ウェブ上で共同作業できるシステム。その共同作業に加え、電子地図上にプロジェクト情報をリンクさせ、プロジェクト情報を可視化した結果、関係者は該当地区の旗をクリックするだけで、その時点の詳細なプロジェクトの情報が表示・確認でき、複数の拠点及びプロジェクトが同時に進行するようなケース等で利用している。

⑤業績予想の変動について

当社は、業績予想を発表するにあたって個々のプロジェクトの現状を確認しておりますが、プロジェクトの進捗過程で顧客の事情等により、プロジェクトの進行予定等が変動する場合には、当該事業年度の売上及び利益に大きな影響を与える可能性があります。

⑥自然災害によるリスク

自然災害が発生した場合、被災地域において、社会インフラが大規模に損壊し、相当期間に亘り生産・流通活動が停止することで建築資材・部材の供給が一時的に途絶えたり、多数の社員が被災し勤務できなくなったりした場合、契約締結・工事着工・工事進捗が遅延し、当社の業績に影響を与える可能性があります。

(5) 継続企業の前提に関する重要事象等

該当事項はありません。

2. 企業集団の状況

該当事項はありません。

3. 経営方針

(1) 会社の経営の基本方針

当社は、『フェアネスと透明性、顧客側に立つプロフェッショナル』を企業理念とし、CM手法による『計画・設計&PM(プロジェクト・マネジメント)』の第一人者であり続けることを基本方針としています。

(2) 目標とする経営指標

当社が重視している経営指標は、売上粗利益及び経常利益です。

当社の売上高は、マネジメントフィーのみを収益の源泉とする「ピュアCM」方式と、マネジメントフィーと工事原価で構成される請負型の「アットリスクCM」方式とで、その規模が大きく異なることから、社内では、売上粗利益(売上高から社内コスト以外の売上原価を控除した金額)にて収益の伸びを管理しております。

売上粗利益を着実に増やした上で、業務効率の改善による人件費を中心とした社内コストの低減により、経常利益を伸ばすことが出来ると考えております。社員全員の時間当たり業務単価を設定し、プロジェクト毎の採算や生産性アップ等をタイムリーに管理するマンアワーコストの仕組み(以下「マンアワーコスト管理システム」)を導入しており、プロジェクト毎にきめ細かい利益管理を実施しています。

(3) 中長期的な会社の経営戦略

下記(4)に記載した「会社の対処すべき課題」に邁進致します。

(4) 会社の対処すべき課題

① 社会情勢の変化への対応力強化

一部の建設物価がやや落着きを見せ始めましたが、発注者のコスト意識の高まりは従来にも増して続くものと考えられます。また、建設業界に限らず、多くの業界で偽装や隠蔽問題について広く報じられ、発注者側に立つプロへの世の中の関心が高まっております。

また、東日本大震災を契機に全国各地で関心が高まっている防災・減災・省エネ・環境に対する取り組みを踏まえ、各種の全国防災事業と経済成長基盤となる社会資本整備を始め、高度経済成長期に整備された大量のインフラや建築物が一斉に老朽化する中で、技術者不足は円滑な維持更新に重大な支障を来す懸念もあります。

いかなる環境下においても、顧客側に立つプロとして、徹底したコスト削減策のみならずプロジェクト期間中一貫して顧客本位のソリューション提案の継続が可能となるよう、引き続き優秀なメンバー採用と教育訓練を進めて参ります。

② ブランドの確立

企業の勝ち残り競争の厳しい中、一方で企業には社会的責任や説明責任が強く問われています。それ故に私共では、自らの立ち位置を常に意識しながら、プロジェクトのプロセスや、プロジェクトに関連する情報のすべてを可視化し「顧客本位のプロのサービス」を片時も忘れることなく努めてまいります。

CM手法の認知度が高まりを見せる中で、発注者への高い顧客満足度の提供だけでなく、設計者および施工者においても、安心して競争に参加できる、公正且つ透明性を担保した当社独自のCMサービスを、ブランド化できるよう努めて参ります。

③ サービス品質の向上

お客様に満足のいく品質のサービスを提供する為には、お客様の事業およびプロジェクト目的を理解し、お客様が判断に用いるプロジェクト情報を整理し、お客様に分かり易く説明する必要があります。

専門性を持った当社のプロがお客様側に立ち、公正且つ透明性の高いプロジェクト遂行を実現し、激化するグローバル競争において、お客様の課題解決にスピード感を持って貢献できるサービス品質向上に取り組んで参ります。

(5) その他、会社の経営上重要な事項

該当事項はありません。

4. 会計基準の選択に関する基本的な考え方

当社の事業は現在国内に限定されており、海外での活動がないことから、当面は日本基準を採用することとしております。今後の国内他社の I F R S 採用動向を踏まえつつ、I F R S 適用の検討を進めていく方針であります。

5. 財務諸表

(1) 貸借対照表

(単位：千円)

	前事業年度 (平成27年3月31日)	当事業年度 (平成28年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	1,451,133	1,361,551
完成工事未収入金	1,696,370	2,342,411
売掛金	6,034	5,607
未成工事支出金	40,652	27,809
前払費用	50,654	57,355
繰延税金資産	110,860	107,758
短期貸付金	30	900
その他	2,951	9,939
流動資産合計	3,358,688	3,913,334
固定資産		
有形固定資産		
建物	62,208	62,478
減価償却累計額	△33,604	△39,376
建物(純額)	28,603	23,101
工具、器具及び備品	87,468	91,715
減価償却累計額	△59,610	△65,316
工具、器具及び備品(純額)	27,858	26,399
有形固定資産合計	56,462	49,501
無形固定資産		
商標権	54	21
特許権	-	1,156
ソフトウェア	11,716	15,814
電話加入権	1,467	1,467
無形固定資産合計	13,239	18,461
投資その他の資産		
投資有価証券	30,609	3,725
長期前払費用	2,365	2,366
繰延税金資産	123,088	123,691
差入保証金	49,892	50,189
敷金	78,820	78,929
投資その他の資産合計	284,776	258,902
固定資産合計	354,477	326,865
資産合計	3,713,165	4,240,200

(単位：千円)

	前事業年度 (平成27年3月31日)	当事業年度 (平成28年3月31日)
負債の部		
流動負債		
工事未払金	534,518	731,520
買掛金	6,143	31,339
1年内返済予定の長期借入金	68,992	11,038
未払金	51,706	61,725
未払費用	67,822	74,643
未払法人税等	134,105	96,986
未払消費税等	52,991	84,669
未成工事受入金	2,914	2,539
預り金	26,335	25,265
賞与引当金	259,630	290,108
工事損失引当金	4,610	-
流動負債合計	1,209,770	1,409,837
固定負債		
長期借入金	11,038	-
退職給付引当金	197,632	229,779
役員退職慰労引当金	192,903	200,980
固定負債合計	401,573	430,760
負債合計	1,611,343	1,840,597
純資産の部		
株主資本		
資本金	534,192	534,192
資本剰余金		
資本準備金	340,514	340,514
その他資本剰余金	2,278	12,627
資本剰余金合計	342,793	353,142
利益剰余金		
利益準備金	6,159	6,159
その他利益剰余金		
別途積立金	300,000	300,000
繰越利益剰余金	1,106,703	1,385,452
利益剰余金合計	1,412,863	1,691,612
自己株式	△205,363	△193,395
株主資本合計	2,084,485	2,385,551
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	△1,958	-
評価・換算差額等合計	△1,958	-
新株予約権	19,295	14,050
純資産合計	2,101,822	2,399,602
負債純資産合計	3,713,165	4,240,200

(2) 損益計算書

	(単位：千円)	
	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
売上高	8,244,671	7,372,038
売上原価	6,403,955	5,588,920
売上総利益	1,840,715	1,783,118
販売費及び一般管理費	1,108,913	1,138,038
営業利益	731,802	645,080
営業外収益		
受取利息	518	587
新株予約権戻入益	185	-
未払配当金除斥益	319	266
受取保険金	-	2,040
その他	205	375
営業外収益合計	1,229	3,270
営業外費用		
支払利息	1,951	879
投資有価証券売却損	-	1,075
売上債権売却損	160,848	75,208
投資事業組合投資損失	2,993	986
投資有価証券評価損	4,517	-
その他	11	0
営業外費用合計	170,321	78,149
経常利益	562,710	570,200
税引前当期純利益	562,710	570,200
法人税、住民税及び事業税	228,740	194,608
法人税等調整額	△16,189	1,529
法人税等合計	212,550	196,137
当期純利益	350,159	374,063

(3) 株主資本等変動計算書

前事業年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益準備金	利益剰余金		利益剰余金 合計
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計		その他利益剰余金		
					別途積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	534,192	340,514	724	341,239	6,159	300,000	823,735	1,129,894
当期変動額								
新株予約権の行使			1,553	1,553				
剰余金の配当							△67,191	△67,191
当期純利益							350,159	350,159
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)								
当期変動額合計	—	—	1,553	1,553	—	—	282,968	282,968
当期末残高	534,192	340,514	2,278	342,793	6,159	300,000	1,106,703	1,412,863

	株主資本		評価・換算 差額等	新株予約権	純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金		
当期首残高	△207,403	1,797,923	△385	20,299	1,817,837
当期変動額					
新株予約権の行使	2,040	3,593			3,593
剰余金の配当		△67,191			△67,191
当期純利益		350,159			350,159
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)			△1,572	△1,004	△2,577
当期変動額合計	2,040	286,562	△1,572	△1,004	283,985
当期末残高	△205,363	2,084,485	△1,958	19,295	2,101,822

当事業年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金 合計
					別途積立金	繰越利益 剰余金		
当期首残高	534,192	340,514	2,278	342,793	6,159	300,000	1,106,703	1,412,863
当期変動額								
新株予約権の行使			10,349	10,349				
剰余金の配当							△95,314	△95,314
当期純利益							374,063	374,063
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)								
当期変動額合計	-	-	10,349	10,349	-	-	278,748	278,748
当期末残高	534,192	340,514	12,627	353,142	6,159	300,000	1,385,452	1,691,612

	株主資本		評価・換算 差額等	新株予約権	純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金		
当期首残高	△205,363	2,084,485	△1,958	19,295	2,101,822
当期変動額					
新株予約権の行使	11,968	22,317			22,317
剰余金の配当		△95,314			△95,314
当期純利益		374,063			374,063
株主資本以外の項目 の当期変動額(純額)			1,958	△5,244	△3,286
当期変動額合計	11,968	301,066	1,958	△5,244	297,779
当期末残高	△193,395	2,385,551	-	14,050	2,399,602

(4) キャッシュ・フロー計算書

(単位：千円)

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税引前当期純利益	562,710	570,200
減価償却費	22,877	22,354
賞与引当金の増減額 (△は減少)	77,355	30,478
退職給付引当金の増減額 (△は減少)	25,789	32,147
役員退職慰労引当金の増減額 (△は減少)	11,309	8,077
受取利息及び受取配当金	△518	△587
支払利息	1,951	879
投資有価証券売却損益 (△は益)	-	1,075
投資有価証券評価損益 (△は益)	4,517	-
投資事業組合投資損失	2,993	986
売上債権の増減額 (△は増加)	△14,642	△645,614
未成工事支出金の増減額 (△は増加)	△25,680	12,843
仕入債務の増減額 (△は減少)	△170,349	222,197
未成工事受入金の増減額 (△は減少)	△9,271	△374
工事損失引当金の増減額 (△は減少)	△2,524	△4,610
その他	10,476	42,176
小計	496,992	292,230
利息の受取額	416	485
利息の支払額	△1,919	△904
法人税等の支払額	△291,831	△234,140
営業活動によるキャッシュ・フロー	203,657	57,670
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	△100,000	-
定期預金の払戻による収入	-	100,000
有形固定資産の取得による支出	△11,266	△10,554
無形固定資産の取得による支出	△4,879	△10,060
敷金の差入による支出	-	△1,673
敷金の回収による収入	200	1,212
投資有価証券の取得による支出	-	△10,000
投資有価証券の売却による収入	-	8,924
投資有価証券の償還による収入	13,400	21,960
その他	△6,174	△1,059
投資活動によるキャッシュ・フロー	△108,720	98,748
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	△100,000	-
長期借入金の返済による支出	△121,884	△68,992
株式の発行による収入	2,775	17,073
配当金の支払額	△66,578	△94,081
財務活動によるキャッシュ・フロー	△285,687	△146,000
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△190,749	10,418
現金及び現金同等物の期首残高	1,541,883	1,351,133
現金及び現金同等物の期末残高	1,351,133	1,361,551

(5) 財務諸表に関する注記事項

(継続企業の前提に関する注記)

該当事項はありません。

(セグメント情報等)

(セグメント情報)

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社はオフィスや各種施設に関わるCM（コンストラクション・マネジメント）手法のプロジェクト・マネジメント事業を展開しており、そのサービスの内容から、「オフィス事業」、「CM事業」及び「CREM事業」の3つを報告セグメントとしております。

「オフィス事業」は、オフィスの移転・新設・改修のプロジェクト・マネジメント、ICT・データセンターの構築、ワークスタイルの変革等、オフィスづくりと運用に関するあらゆる業務をサポートしております。

「CM事業」は、ビルや学校、工場、医療施設、鉄道駅施設、商業施設、その他各種施設の建設・運用に関する業務をCM手法でサポートしております。

「CREM事業」は、企業の保有資産の最適化をサポートするCREM（コーポレート・リアル・エステート・マネジメント）として、固定資産の管理・運用業務、多拠点統廃合業務をアウトソーサーとして最適化するサービス等を提供しております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失の金額に関する情報

前事業年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

(単位：千円)

	オフィス事業	CM事業	CREM事業	合計
売上高				
外部顧客への売上高	3,595,174	3,263,450	1,386,045	8,244,671
セグメント間の内部売上高又は振替高	—	—	—	—
計	3,595,174	3,263,450	1,386,045	8,244,671
セグメント利益	321,734	227,975	182,092	731,802

(注)セグメント利益は、損益計算書の営業利益と一致しております。

当事業年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

(単位：千円)

	オフィス事業	CM事業	CREM事業	合計
売上高				
外部顧客への売上高	3,906,219	2,421,797	1,044,021	7,372,038
セグメント間の内部売上高又は振替高	—	—	—	—
計	3,906,219	2,421,797	1,044,021	7,372,038
セグメント利益	313,155	140,651	191,273	645,080

(注)セグメント利益は、損益計算書の営業利益と一致しております。

(関連情報)

該当事項はありません。

(報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報)

該当事項はありません。

(報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報)

該当事項はありません。

(報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報)

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
1株当たり純資産額	185.72円	211.08円
1株当たり当期純利益金額	31.23円	33.26円
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額	30.94円	32.83円

(注) 算定上の基礎

1. 1株当たり純資産額

	前事業年度 (平成27年3月31日)	当事業年度 (平成28年3月31日)
貸借対照表の純資産の部の合計額(千円)	2,101,822	2,399,602
普通株式に係る純資産額(千円)	2,082,527	2,385,551
差額の主な内訳(千円)		
新株予約権	19,295	14,050
普通株式の発行済株式数(千株)	12,725	12,725
普通株式の自己株式数(千株)	1,511	1,423
1株当たり純資産額の算定に用いられた普通株式の数(千株)	11,213	11,301

2. 1株当たり当期純利益金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
1株当たり当期純利益金額		
当期純利益(千円)	350,159	374,063
普通株主に帰属しない金額(千円)	—	—
普通株式に係る当期純利益(千円)	350,159	374,063
普通株式の期中平均株式数(千株)	11,213	11,247
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額		
当期純利益調整額(千円)	—	—
普通株式増加数(千株)	103	145
(うち新株予約権(千株))	(103)	(145)
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定に含めなかった潜在株式の概要	—	—

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

6. その他

(1) 監査等委員会設置会社への移行について

当社は、平成28年6月23日開催予定の第36期定時株主総会での承認を前提として、監査等委員会設置会社に移行する予定であります(平成28年3月28日付開示の「監査等委員会設置会社への移行に関するお知らせ」をご参照ください)。

(2) 役員の異動

① 代表者の異動

該当事項はございません。

② その他役員の異動(平成28年6月23日予定)

1. 新任予定取締役

取締役(社外)

取締役(監査等委員) 水野 辰哉(現 監査役)

取締役(監査等委員) 志賀 徹也(新任)

取締役(監査等委員) 小須田 明子(新任)

2. 退任予定取締役

取締役

内山 伸一(顧問 就任予定)

3. 退任予定監査役

監査役(社外)

青木 達雄(現 常勤監査役)

原田 克治(現 監査役)